有島武郎著作集第十四輯『星座』論序説

―エピグラフ解釈を中心にして(二)―

宮野光男

大地 ―― 大地は自足してゐる、
私は星座等が更らに近くにあるべき必要を見ない、
私はそれらが極めて正しい所にあるのを知る、
それらに属するものはそれらに満足してゐるのを知る。

「星座」のエピグラフとして揚げられているホイットマン詩「大道の歌」第一連の八行目から十一行目までの四行、それまで有島武郎がエッセイのなかで「大道の歌」を引くきおりには省略してきたこの四行の読みを通して、「星座」分析のためにいくつかの示唆を得ることができることは、前論で述べたところであるが、本論においては、前論で保留しておいた〈大地 ―― 大地は自足してゐる〉行のエピグラフにおける省略の意味、およびそれに続く三行の、もうひとつの解釈の可能性について考えてみよう。

＊

まず第一に、なぜ第一連の八行目〈大地 ―― 大地は自足してゐる〉、がエピグラフでは省略されているのか、という問題について。〈大地 ―― 大地は自足してゐる〉は、「大道の歌」のなかでホイットマンの基本的な自然観、人間観が示されているところであることに注目してみよう。

この詩全体に流れているホイットマンの思いが、〈この地球、この宇宙にあるものすべてを認め、健全に、自由に、そして、友愛の心を抱いて、大道 ―― 地上の大地、現実の世界、 ―― 宇宙 ―― 神へ通じる『大道』を歩こう。そこは不滅の道である。又、その大道を闊歩するには、不断の精進、努力が必要である。そして、魂は、進歩と征服とを続ける。『大道』を歩き続けよう。〉(註一) という、まことに積極的な前進志向の意欲に満ち溢れたものであると云われているが、有島にとっては、荒野にさまよいつつある人間が、始原の至福の庭に憧れながら、その完成の幻をめざして歩き続けている者としての共感をもって、この詩への関心を示すことができたにちがいないことは、前論においてすでに述べたところでもある。

ホイットマンは、「草の葉」のなかで〈私自身〉を歌い続けた詩人であり、有島もそのことに対しては十分に意識的であった。「私自身の歌」の全訳が、有島訳の『ホイットマン詩集』第二輯の冒頭に位置づけられていることはそのことをよく物語っている。有島が

エッセイのなかで引いている〈私は私自身を歌う〉にみられる〈一人称の自我礼讃〉が、〈詩人にとって相手、二人称の自我、更に三人称の自我、そしてそれぞれの複数、つまり、すべての人のそれぞれの自我礼讃に通じる。そして、更に、そのような人間肯定は、地球、大地の肯定に、更に、もっと飛躍し、宇宙の肯定にと高まる〉（註二）思いが、まず省略された一行に収斂しているのである。その意味でこの詩行は、ホイットマンの自己認識における、あるいは自己をも包含するところの宇宙論における基本的な肯定性の開示であり、新たなる出発のための、確かめるべき到達点の提示部なのである。

有島にとってこの自然観、つまり人間観は、先述のように、人間の否定的存在を肯定する根拠として掲げられている詩のなかで確認することができることであった。カインの末裔を、その血脈にある姦淫の女を無条件に無制限に受容することを喜びとするところの〈私＝ホイットマン〉、つまり詩人がそのことを可能にするのだ、という有島であるが、このような詩人性を豊かにもった者が、救い主として存在するかぎり、異邦人は生きることができるのである。そのような自己充足的宇宙の完璧性、至高の達成が歌い出されている第八行が省略されているということは、そのことがすでに自明のことであるという認識からであろうか、あるいは以下三行の前提になっているこの行は、大地の自己充足性それ自体の根拠が確認以前の問題である有島にとっては、けっして自明の前提であり得ないことの表明であろうか。つまり、有島にとっては、その本質において未完成の魅力をもった詩人ホイットマン（註三）のステップとしての到達点であったこのような認識が、未達成の目標であったということを、換言すればこのところに有島の新しい出発にあたっての目標設定の、一種の表明になっているからであろうか、そのいずれかであるにちがいない。

しかし、エピグラフとして揚げられている三行が〈星座〉に中心点が置かれている詩行であることは明らかであるが、その前提としての根拠を提示していることになる大地の自足性は、星座の自足性を、あるいは独立性を保証する条件であることは論をまたないところであろう。したがって、もしも、〈星座〉が大地との等質の存在であるとするならば、大地の自足性の根拠が問われるのと同様に、星座の存在性のその根拠もまた問われるところであるが、有島にとって、大地は、あるいは存在の根拠としての地球は、自足性をもって位置づけられることのできる場ではなかったことはすでに述べた。つまり、カインの末裔である有島にとって、その存在の場である大地が、けっして豊饒の土地ではなく、荒野であるとの認識がその根拠にあったことを想起しなければならないところなのである。

そのことは、道喪失感をもたらすものであったことも、あわせて想起しなければならないことであった。絶筆の短歌一首〈道はなし世に道はなし心して荒野のうえに汝が足を置け〉は、そのことをよく表現しているのである。

このような大地観をもっている有島が、〈大地は自足している〉とはとうてい歌いだすことは不可能であろう。あるいは、共感を表明することに忸怩たる思いを持たざるを得なかったことは当然のこ

とであろう。

ふたたび繰り返すが、エピグラフとして引用されている三行が、その自足性を獲得することができるのは、第八行目の、大地の自己充足性が、あくまでも前提条件なのである。しかし、その肯定性の提示部としてのこの詩行が、省かれてしまっているということは、これまでは、作品において思いきり、否定の世界が表現されていても、エピグラフ詩に表現されている絶対的肯定性とバランスがとれているものとして位置づけられていたものが、ここに至って、有島の否定的自己認識は、肯定の可能性を、その根拠をも含めて問わなくてはならない状況に立ち至ったことを示していることになるのである。

いずれにもせよ、これまでに考察してきた（註四）ように、著作集のエピグラフとしてホイットマン詩「草の葉」のなかの生命の存在のためのあらまほしき肯定性、信じうる肯定性を表現している詩篇が引かれていたことを想起することができるところであるが、事ここに及んで、既成の事実としての肯定性の提示ではなく、本質において否定性を内包している人間存在のダイナミズムを提示することへの内的変化をこの三行に託している有島であることが、このところに示されていることになるのではないだろうか。

＊

白官舎は札幌独立教会の仮会堂であった（註五）。この建物が明治三十二年ころは、農学校の学生の下宿として用いられていたことも考えられるのであるが、詳しいことは判らない。おそらくこの建物は、諸家の解説にもあるように、素材になっている有島の札幌農学校の学生時代の生活の場として虚構されたところであろう。（註六）

有島の学生生活を表現するには、むしろ恵迪寮（註七）のほうがふさわしいようにも思われるのであるが、ここで、白官舎という建物の実名が用いられているということは、きわめて象徴的な表現なのである。

建物の白官舎が直接話題になっている第四章については、〈白官舎の概説〉の章として位置づけられてきた歴史がある。（註八）

石狩平野の〈大きな原野の片隅に〉位置している白官舎は、〈気づかれのした若い寡婦のやうにしだらなく丸寝してゐる〉姿として表現されている札幌市街の〈中央近いとある街路の曲り角に〉ある建物で、それは、

ずり落ちた瓦は軒に這い下り、そり返つた下見板の木目と木節は鮫膚の皺や吹出物の跡のやうに、油気の抜け切つた白ペンキの安白粉に汚なくまみれてゐる。けれども夜になると、どんな闇の夜でもその建物は燐に漬けてあつたやうにほの青白く光る。それは全く風化作用から来た或る化学的の現象かも知れない。「白く塗られたる墓」といふ言葉が聖書にある……あれだ。

と表現されている。

さらに、いまや冬を迎えようとしている札幌の雰囲気が、〈寂寞〉、〈淋しさ〉という言葉で表現され、白官舎の明かりのついていない

窓が〈死人の眼のやうに暗かつた〉、とその印象は青春群像が生きている場のものとしてはふさわしくないものであることが気になるところであるが、これは、まず第一に有島にとって表現しようとしている学生たちひとりひとりが、死をその本質としてもっている存在であることを、彼らの生活の場である白官舎の、あるいはその存在の場である札幌が、飛躍した表現をもってすれば人生そのものが、孤独で空虚な深淵として描出しなくてはならない自己認識があったことの表明であろう。白官舎が、聖書で云うところの〈白く塗りたる墓〉という比喩表現で表されていることもその故であるにちがいない。

いうまでもなく、それが、イエス・キリストによってなされた、人間の偽善性についての比喩表現であることは周知のことである。〈註九〉ということは、有島は、白官舎が、そのような場であり、その中に住まいしている者たちが、その本質において〈偽善者〉であることを表現していることになる。

「星座」に登場する人物たちが、それぞれの存在性において本質的に偽善者であると言うことは、いささか勇気のいることである。しからば、彼等はそれぞれのかたちで自らの偽善者性を実感している存在である、ということであろうか。いずれにもせよ、このところに有島の星座群像の自己充足性への否定的態度を見ることができるように思われるところである。

これは、視点の問題として考えることの意味を、この章にも及ぼすべき問題であることを意味している。つまり、白官舎を白く塗った墓とする視点が、第四章の視点であると同時に、作品全体に及んでいる視点ではないか、ということなのである。

視点といえば、江種満子氏の興味深い視点論がある（註十）が、氏の、T・トドロフ、J・ブイヨンの説を援用しながら言われる〈『星座』の視点の型〉が、〈ごく希に①の型〔①話者〕作中人物（≪背後から≫の視点）〕が主導する――四章、五章の白官舎の由来と現況を語る部分と白官舎に大勢の青年が集まった一夜の光景を描く部分がそれに相当する――〉という指摘は、具体的な視点人物が描かれていない章であるがゆえに、全体の枠付けであるところの基本的な視点が、この章にもっとも顕著なかたちで描かれているということになるのであろう。

表現の向こう側に潜んでいるもうひとつの視点は、作者有島の視点であると同時に、登場人物たちの思いのもうひとつ向こう側にあって、彼らを位置づけている存在のあることを示している重要な章であるにちがいない。それは、エピグラフ詩において待望されている、星の群の存在の自足性を、あるいは存在の絶対性を生かす者への憧憬とも深く係わっているということができるのではないだろうか。ロング・ショットの映画的手法で表現されている白官舎のたたずまいの表現は、まことに印象的なのである。

＊

大地がその自足性を謳歌することができない荒野であったように、星座もまたそこに属する青年群像たちが、偽善者集団であったことを、有島は白官舎の白い墓の印象で表現していることになるが、この視点は、有島の精神構造の内部にあっていかに位置づけること

ができるのであろう。

この問題を考えるために、まず、有島が、このところでなぜ〈星座〉に注目したのか。題名をなぜ「星座」としたのかという問題を通して考えてみよう。

有島が、この作品を、「白官舎」から「星座」へと変更したのは、大正十年十二月のことであることが知られている（註十一）が、「星座」という作品名の由来についての考察については、諸説あり、いずれも青春群像を星座の群と捉えることにおいて共通している。

あるいは、星野という姓名からの自然な思いつきということもあろう。（註十二）あるいは、大地、地球との対比における個性を持った群像のイメージを星座に託したのではないかとも思われるところであるが、有島の意図としては、ホイットマン詩における〈星座〉発見が、直接その動機であろう。あるいは、偽善者集団である青年群像の肯定の可能性が問われたときに、ホイットマン詩「大道の歌」の三行が意味をもった詩行として浮上してきた、というべきであろうか。

ホイットマンが自らの詩の中で星座を歌うのはどのような場合であるかを考えてみてもそのことは言えそうである。

詩集「草の葉」のコンコルダンス（註十三）によれば、いま話題にしているエピグラフ詩をいれて〈星座〉は三ヵ所に出てくる。

まず、「仕事を賛える歌」第三歌にみられる星座。

〈広々とした空中に浮かぶ太陽と星たち、／りんごの形の地球、そしてそのうえにいるわたしたち、〉（岩波文庫中巻）と歌い出されているこの詩の第三連は、〈あなた〉を讃美するための歌である。そのあなたとは、新しい命を生み出すところのあなたであり、自然のあるがままの姿、それは〈褐色の陸地や青い海が地図や海図のために、／星たちは星座に組み入れ気まぐれな名前をつけるため〉に存在しているのではない、というホイットマンの主張が見られる。つまり、星座はこのところでは一種の枠付けとして、有島のいわゆる〈知的生活〉（「惜しみなく愛は奪ふ」）のレベルへの位置づけという意味でのマイナスイメージを伴った言葉として使われているようである。

つぎに、「君、終わりなくうねりつづける潮流よ」にみられる星座。

君、終わりなくうねりつづける潮流よ、君、これだけの仕事をなしとげる力よ、／君、空間の広がりの中で、求心的に、遠心的に働く目に見えぬ力よ、／太陽、月、地球、そしてすべての星座と一体の友よ、／遠い星からわたしたちへ君が伝えてくれる言葉は何、シリウスの言葉は、カペラの言葉は何、（以下略）

（岩波文庫下巻）

この場合、〈星座〉は自然の一部分、全宇宙の一部分を表している。この詩の中心は、〈潮流〉にあり、〈あまたの部分をかかえた宇宙をひとつのものにまとめている〉〈流動的で広大な〉〈実体〉としての存在の象徴的な表現として用いられているところである。

このように見てくると、〈星座〉そのものの固定した意味はないようである。むしろ星に関心があったのであり、〈遠い星からわたしたちへ君が伝えてくれる言葉は何、シリウスの言葉は、カペラの言葉は何〉からもうかがわれるように、可能性を秘めた神秘的な存在性への憧憬をみることができるところである。つまり、状況によってはプラスにもマイナスにも位置づけられる、器、場あるいは集団、というところであろうか。とすれば三番目の用例である「大道の歌」における星座は、大地に対する星座であり、その意味では大地は地球としたほうがいいのかもわからないが、内容的には自足している大地と、本質的に等質の、もうひとつの存在としての星座およびそれに属している星の群であることを表していることになる。もち論それが人間群像であり、グループとしての人間を象徴的に表現したものであることは言うまでもないことである。その意味では先の〈白く塗りたる墓〉という印象は、建物の印象であると同時に、なかに住んでいる学生群像の総称だと考えてもよいことになるのである。

そのことは、希望に満ちた青春群像としてのイメージで語られることの多い「星座」の人物たちが、有島にとってはかならずしも明るい未来を予見することのできる存在ではなかったことを表現しているということになるのであるが、そのイメージは、おそらく「泉」に掲載した「瞳なき眼」詩群のひとつ、「手」の一節〈五つの指の淋しい群像、／何を彼等は考へ、／彼等は何をするのだ。／指さすべき何が……握りしむべき何が……〉が、その印象をよく伝えているように思われる。

＊

有島にとって、否定的な存在の最たる者は、偽善者という表現で言い表されるのがひとつの特色であった。その場合、聖書のこの部分はよく引用されている。たとえば、国家について、〈我レ国家ヲ何ニ喩ヘンヤ。糞桶の蓋ノ如シ。（中略）又国家ヲ何ニ喩ヘンヤ。白ク塗リタル墓ノ如シ。我等其外ヲ見テ荘厳ト威権ニ打タレ、之レヲ発キテ唯白骨ト死灰ト不浄トヲ見ル。〉（日記　明三五・十二・三一）と手厳しい。あるいは、米国留学中、フランクフォード精神病院での看護夫生活をしていたおりに、管理人の娘イーデスを想いながら、その美しさに感動した心の動きを〈自ラ余ノ粗忽ナル〉ものとして、ひとたびはしりぞけてはみたものの、〈美シキモノハ美シキナリ。是レヲ美シカラズトナスハ偽善者ナリ。白ク塗リタル墓ナリ。〉（日記　明三七・七・十九）と、内面化していることを知ることができるところである。

この思いが、有島の精神構造にしっかり根をおろしていることは、つまり、有島自身がいかに偽善的存在であったかを問題にせざるをえなかったことは、「『リビングストン伝』第四版の序」（大八・六）がよく表しているところである。

有島にとって「星座」の人物たちを規定している偽善性とは、いかなる存在の謂いであろうか。

「星座」に即して言えば、人間の、青年期における顕著なかたちで表面化する偽善性は、たとえば柿江などもその一例であるが、有島がここで表現したかったことは、もっと内面的なものであったにちがいない。それは、有島自身の青年時代から持ち続け、問い続け

てきたところの否定的自己認識の回復の可能性追求と深い関わりをもっているにちがいない。そして、有島にとって、自己認識における否定性の一顕現であるところの偽善者性について、それがキリスト教教義の桎梏から開放された地点でいかに位置づけられ、その克服の可能性が考えられていたのであるかを考察するにあたって、より積極的な意味付けをみることができるのは、「惜みなく愛は奪ふ」第三章である。

私は明かに私は偽善者だ。明かに私は偽善者である。さう言明するのが、どれ程偽善的な行為であるぞとの非難が、当然喚び起こされるのを知らない私ではない。それにもかゝはらず、私は明かに偽善者であると言明せねばならぬ。

第三章冒頭の部分でこのように宣言する有島に一種の居直りをみることもできるところであるが、その内実は逆にもっとも弱い部分が、はしなくも現れてしまったところではないかと思われる。

自らが〈弱い〉存在であることを熟知している有島が、〈その反面に多少の強さを持つてゐる。彼は自分の弱味によつて惹き起こした悲惨さを意識し得る強さを持つてゐるのだ。而してその弱さを強さによつて彌縫しようとする〉ものが、偽善者なのだというのである。そして、世人が、〈偽善者の本質は、強みを以て弱みを彌縫するばかりでなく、その彌縫に無恥な安住を敢へてする点にある、だから偽善者は救はるゝことが出来ないのだ〉という批判に、〈弁解をしないではゐられない〉という。なぜならば、偽善者を〈無恥な安住〉を決め込む輩だとすること自体が、いわゆる〈義人〉――この場合有島がもっとも批判的な存在として取り上げているキリスト教信仰者だ、というのが山田氏の意見である（註十四）が――のあまりにも一方的な見方なのであって、有島は、

私は義人が次の点に於て偽善者を信じていたゞきたいと思ふ。それは偽善者も亦心窃かに苦しんでゐるといふ一事だ。考へて見てもほしい。多少の強さと弱さとを同時に持ち合はしてゐるものが、二つの力の矛盾を感じないでゐられようか。矛盾を感じながら平然としてそこに無恥の安住をのみ続けてゐることが出来ようか。

と言うのである。

さらに続けて、こうも言っている。

偽善者よ、（中略）。お前は本当に不愉快な人間だから。お前はいつでも然り〳〵否々といひ切ることが出来ないから。毎時でもお前には陰険なわけへだてが付きまつはつてゐるから。お前は憎まれていゝ。辱められていゝ。悪魔視されていゝ。しかしお前の心の隅の人知れぬ苦痛をそつと眺めてやる人はないのか。お前が人並みに見られたい為めに、お前自身にさへ隠さうと企てゝゐるその人知れぬ苦痛を一寸でも暖かく触らうといふ人はないのか。

人間の内面に潜む二元対立の苦痛に苛まれ、疎外状況に置かれている孤独な魂に注がれる愛の眼差しを切望している存在が〈偽善者〉だという有島の人間観は、もっとも人間的な存在をあえて偽善者と呼んだまでのことであって、愛をあえて奪う愛と規定することによってその純粋性の保証としようとした逆説の論理（註十五）と共通のものであることを知ることができるところである。

だから、〈義人のすぐ隣に住むと考えられてゐる罪人〉は〈自分の強みと弱みとの矛盾を声高く叫び得る幸福な人達〉なのであり、〈偽善者は叫ぼうとする程に強さを持ち合はしてゐない。故に神は聞かない〉のである、とも言うのである。

遠藤周作の弱者論（註十六）に通じている偽善者論のように思われるのであるが、基本的な差は、遠藤には語りかけるキリスト――復活のキリストが存在しているのに対して、有島の場合は、人格としてのキリストが存在していない、という決定的な相違があるわけで、そのことが、〈罪人のあの柔和なレシグネーションの中に、昂然として何物にも屈しまいとする強さを私は明かに見て取ることが出来る〉というのも、意識的には自律的人間に徹しようとしている有島の生き方の反映を表現していることになるのであろう。

有島の否定的自己認識にそのときどきの表現を与えるならば、愚者、罪人、糜乱した魂、虫、反逆者、カインの末裔ということになる。したがって、肯定的人間として位置づけられているように見えるローファー、本能的生活者、第四階級者もまたその本質において等質の存在であることの表現であることについては、すでに指摘してきたことである。（註十七）そして、「星座」においては、偽善者とも呼ばれることができるものであることを知ることができるのである。

ところで、「星座」論としては、白官舎の住人たち以外の存在をいかに位置づけるかという問題がある。おそらく、この作品の眼目が、白官舎の住人たち相互の、と同時に周辺の者たち――ぬい親子、星野の家族、園の家族、新井田夫妻など――との内面の葛藤のドラマであり、その関係を通して、いかに影響しあうかを――〈星座〉に掛けて言うならば引力の影響力を――検証する意図をみることができるところであろう。それは、有島の、ひたむきな自己追求の文脈において捉えることのできる変化の可能性追求という究極の課題へのひとつのアプローチであり、標題である〈星座〉は、人間の可能性追尋のプロセスの表明であろう。それは、否定性がそのままのかたちで肯定性へと逆転する可能性ではなく、それを可能ならしめる者の存在を問うという意味での可能性追求であることは、大地の自足性を否定したことによって明らかであることはすでに述べたところである。

存在をそのままの形で受容するということは、受容者の論理であり、被受容者は、その場合願わしきこととしてひそかに希望していることではあるが、当然の権利として主張すべきことではない。自己認識としては、あくまでもそれは否定の文字を冠しなければ、居直りの論理になってしまうであろう。有島のローファー論が、そうならないでいるのは〈醜〉や〈邪〉をも受容する絶対的受容者を想定した否定的自己認識に与えたひとつの表現だからである。

＊

先に、「星座」に描かれている学生群像を偽善者群像と呼ぶことに対する忸怩たる思いについて述べたが、いま有島がいうところの偽善者であるという意味において、それは、むしろ人間として在るべき姿でもあるわけで、そのことは、登場する学生群像一人一人の分析によって明らかにすることができるところである。

たとえば、星野像についての分析と解明については、園、ぬい、柿江、渡瀬などの分析とともにすでに諸家によって克明になされている（註十八）が、有島にとって彼もまた〈偽善者〉の一人であることを指摘することができるのである。

作品の第一章で、星野が、ぬいの家庭教師を園に依頼する経緯、それも星野の内面のプロセスが表現されているところであるが、このところにも、彼の揺れ動く内面性の表現がある、といえるのではないか。そのことをもっとも端的に表現しているのが、〈蠅〉である。〈黄色く光る障子を背景にして、黒子のやうに黒く点ぜられたその蠅は、六本の脚の微細な動きかたまでも清逸の眼に射込んだ〉と表現されているこの蠅は、星野の微細に動く内面の象徴的表現なのである。

星野の微細な心の動きに合わせるように、蠅はそのつど動き、位置を変えている。

俺はおぬいさんを要する訳ではない。（中略）おぬいさんは何も知らないのだ。

蠅がまた動いた。軽い音……

そのように見ると、星野の思い浮かべた幻想は、彼の無意識の世界におけるおぬいへの隠された思いを顕にしている表象のひとつではないだろうか。

清逸はそこまで考へて来ると眼の前には障子も蠅もなくなつてゐた。かれの空想の魔杖の一振りに、真白な百合のやうな大きな花が見る〳〵蕾の弱々しさから日輪のやうにかゞやかしく開いた。清逸は香りの高い蕊の中に顔を埋めて見た。蒸すやうな、焼くやうな、擽るやうな、悲しくさせるやうなその香り、……（中略）清逸は暫く自分をその空想に溺れさせてゐたが、心臓の鼓動の高まるのを感ずるや否や、振り捨てるやうに空想の花からその眼を遠ざけた。

その時蠅は右の方に位置を移した。

これが、〈その空想の中で官能の香気に陶酔する清逸の心理の点描〉であり、〈蠅の動きによって清逸の思念が動くかのよう、また逆に清逸の空想によって蠅の動きが規制されているかのように表現され、蠅の動きが視覚的現象をこえて更に象徴化されている。〉という山田氏のみごとな鑑賞がある（註十九）が、同じように〈真つ白な百合のやうな大きな花〉の幻想は、ぬいの清逸の内面における存在であることのただならぬさまのひとつの表現であろう。（註二

十）のところに、人目には〈天才的存在として白官舎の住人達からは一目置かれていた存在である〉と見られている星野もまた、その内面において〈瞳を痛くする暗闇〉を見出さなくてはならない、揺れ動く、多感の、悩める青年のひとりであったことを物語っているのである。

星野のそのような存在性は、彼の自然観においても顕著である。有島の自然観がそうであったように、彼もまた自然を通して孤独を思い、自然が人間を越えたひとつの意思をもった存在であることを思わざるを得ない者であったのである。

その星野が、日常的には対立関係にある弟純次の〈「死んでしまふぞ。帰らねえがいゝ」〉という思いがけない、〈低能でない何人からも求められない純粋な親切を感ぜずにはゐられな〉い言葉に〈何となくなつかしいもの〉、〈逆説的な誠〉を感じとっているのは、かくあらまほしき内面の希求の激しさを表現していることになるのであろう。かくして彼もまた〈偽善者〉のひとりなのである。

また彼が、生き方において、女性観において、「宣言」（大六・十二）のBに酷似した存在であることを指摘することによって、彼らが積極的な意味での偽善者群像のひとりであることを明らかにすることができるのではないだろうか。ということは、「或る女」がそうであるように、「星座」もまた「惜みなく愛は奪ふ」の応用編のひとつであることを指摘することになるのであるが、そのことは、Bの否定的自己認識との等質性を指摘することになるのであって、このところに、偽善性の自覚的、無自覚的継承者として星野を位置づけることができることを確認することになる。（註二一）

＊

星野が「宣言」のBとの類似性をいうこのできる存在であるということは、園もまた、「宣言」のAである可能性をもった存在であることを類推することができる根拠でもある。

伝えられている創作意図からして、これは、「運命の訴へ」（大九）との等質性を云う場合もある（註二二）が、それはまた、存在として根元的にもっている否定性のひとつの表現として意図されていた可能性があるということであろう。

作品の展開上興味深いのは、ぬいへの求婚に対して彼女がどのように応えるかということであるが、おそらくぬいは、園の申し出を受けないのではないか。ぬいは、本質的には葉子と同じく愛を求める存在であり、そのなかに人間としての成長を逐げてゆく女性として表現されるのであろうが、可能性としては、葉子の後継者としての、男性のなかに愛の可能性を追い求め続ける存在として、たとえば「宣言」におけるBとの関係を求める女性Y子の後継者として表現されているのか、あるいは、葉子を否定媒介とした歩みをなさしめる、つまり自立の道を模索するのか、彼女に托された可能性は多くあるが、有島のもっとも理想的な女性像として形象されようとしているぬいであるという意味においてポエティック・ウーマン（註二三）の実現を目論むにふさわしい女性として位置づけられようとしているということができるのではないだろうか。その場合の園の位置は、「惜みなく愛は奪ふ」のエピグラフのひとつに表現されている〈報われない愛〉によってよきものを生み出すことのできる者としての可能性を有島が構想していたのではないかと想像すること

もできるのである。

＊

作品が未完であるという意味で、人物論は想像の域を出ないものに終ってしまうことになるが、「星座」が、きわめて象徴的な暗喩表現である〈白く塗りたる墓〉としてとらえることのできる青春群像への有島の思いは複雑である。そして、彼らが偽善者であることからの脱出の可能性（換言すれば、偽善者性の絶対肯定の可能性）は、いかにして可能になるのか。これまでの著作集論において考察してきたように、エピグラフによって表現されている可能性は作品における否定性が有島の実感としての否定性の反映でもあるという意味で対極の一致を可能にする論理として展開してきたのであるが、今まで以上により切実な思いをもって希求されているのではないかと思われる。つまり、この作品が、未完の作品であるということは、作者有島の死をもって生じた時間的結末ではあるが、もっと積極的な未完成性の表現（註二四）として見ることができる可能性を示しているように思われるのである。

本能的生活者にひとつの具体的な表現を与えたものが、詩人であることはすでに述べてきた（註二五）ところであるが、エピグラフとして掲げられている「大道の歌」第一連の三行の詩は、自然――大地のもっている完成性を離れて、「星座」の人物たちひとりひとりに託された詩人性、換言すれば未完成性によって、未来において可能になるという希望をもつことができることを暗示していることにもなるのではないだろうか。

〔付記〕

園、ぬいの分析から、それぞれが「宣言」のA、Y子の後継者としての可能性の指摘をすべきとこであるが、紙幅の関係で指摘のみに留めなくてはならないようである。

ただ、その関係が、肯定的であれ、否定的であれ、園にとっては重大な事柄であるにちがいないわけで、半年後に、自らの将来について過去を振り返りつつ決意を述べるにあたって、ぬいに関して一言も触れていないということはいささか不自然なことではないだろうか。その決意には、何らかの意味でぬいの存在が暗示されているはずであろう。とすれば、第二章の明治三十三年説はいささか根拠が弱いのではないかと思われる。（註二六）

【註】

註一、二　鈴木保昭「ホイットマン：『大道の歌』小論」（『大道の歌～ホイットマン「愛」の讃歌』一九八七・九　翔文社刊所収）

註三　「有島武郎研究――著作集第十二輯『旅する心』を読む――」（『日本文学研究』第二十七号　平成三・十一）

註四　「有島武郎研究――『詩への逸脱』をめぐって（一）――」（梅光女学院大学「日本文学研究」第十一号　昭五〇・十一～「有島武郎著作集第十四輯『星座』論序説　エピグラフ解釈を中心にして（一）」（同前　平五・十一）

註五　前川公美夫「白官舎と時計台」（星座の会編『星座』平元・七　巻末付録）

註六、八、十四、十九、二十二　山田昭夫「星座」の頭註（山田昭夫編　日本近代文学大系第三十三巻『有島武郎集』昭四五・三　角川書店刊所収）

註七　恵迪寮史編纂委員会編『恵迪寮史』（昭八・十一　北海道帝国大学刊）

註九　『新約聖書』「マタイによる福音書」第二十三章二十七節

註十　江種満子「『星座』再論」（『有島武郎論』昭五九・一〇　桜楓社刊所収）

註十一　内田　満「『白官舎』から『星座』へ――作品と創作過程についてのノート」（昭五三・一　「平安女学院短期大学紀要」）

註十二、十八　山田昭夫「星座」頭註（註六に同じ）。なおその他、紅野敏郎「『星座』覚え書」（「明治大正文学研究」昭三一・一）、山田昭夫「作品の展開9「星座」（『有島武郎・姿勢と軌跡』（昭四八・九　右文書院刊所収）、内田満（註十一に同じ）、江種満子（註十に同じ）、江藤太助「『星座』の構想と第一巻」（『有島武郎の研究』平四・六　朝文社刊所収などがある。）

註十三　A CONCORDANCE of Walt Whitman's LEAVES OF GRASS and SELECTED PROSE WRITINGS.
EDWIN HAROLD EBY Edited by

註十五　「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（一）～（三）」（梅光女学院大学「日本文学研究」第二十三～二十五号　昭六三・十一～平元・十一）

註十六　「父の宗教・母の宗教――マリア観音について」（昭四三・一）

註十七、二十五　「『宣言一つ』試論」（「解釈と鑑賞」平元・二）

註二十　『イメージシンボル辞典』（アト・ド・フリーズ著　山下圭一郎他訳　大修館書店　一九八一・三　初版発行　一九八六・四　七版）

註二一　「有島武郎研究――『詩への逸脱』をめぐって（三）」梅光女学院大学「日本文学研究」第十三号　昭五二・十一）

註二三　「『或る女』論（二）――田鶴子と〈poetic woman〉――」（『有島武郎の文学』昭四九・六　桜楓社刊所収）

註二四　「特集未完の小説」（「文学」第四巻第四号　平五・十）

註二六　かねて、この問題に関しては単純な誤植とみる三十二年説と、そうではなく積極的に位置づけることができるとする三十三年説に分かれて論争されてきたが、とくに江頭太助氏の「有島武郎『星座』の構想・再考――シラーの『鏡の賦』との関連」（北九州大学「国語国文学」平五・十一）における三十三年説は作品中の鐘の音をキーワードとして、園における鐘の音の特別な意味づけを、有島のシラー詩「鐘の賦」体験と重ね合わせることによって、それが作品全体の枠付けの役割をはたしていることを実証的に論証したもので興味深い。しかし、付記で述べたように、園の未来に関する決意の中に、ぬいへの思いが欠落していることへの説明がないことは、ひとつの問題点であろう。